

フイデル・カストロ

みづから語る革命家人生

(上・下)

イグナシオ・ラモネ 著 伊高浩昭 訳

Ignacio Ramonet 1

943年生まれ。

キューバ版3版が発行されて
いる。フイデルは06年7月の
腸の手術後も、病床で加筆・
点検作業を続けた。フイデル

の意気込みがつかわれる。

本書は、キューバ革命史の

重要なテーマをほぼもれなく

網羅しており、最高指導者の

回顧という点では、第一級の

資料といえよう。

しかし、革命史の全面的な

評価という点では、当然、さ

まざまな客観的な史料、立場

が違ふ人びとの見解も考慮し

なければならぬであろう。

現在、ラウル政権が取り組

んでいる改革の論拠として

は、個々の誤り、歪みを指摘

したフイデルの過去の演説な

どが引用されている。では、

なぜフイデル自身が改革を行

なかつたのかという疑問が

湧く。ここに、フイデル・カ

ストロという人物を理解する

重要な力があるように思わ

れる。

訳文は、おおむね堅美であ

る。ただ、専門語などに若

干、原意からはずれたものが

散見されるが、本書の訳文の

価値を下げるものではない。

4月19日、キューバ共産党
第6回党大会が終了した。大

会は、広範な国民の切実な要

求に沿って、50年続いた経済

制度の大きな転換に踏み切っ

た。北の巨人、米国の恒常的

な圧力、経済封鎖の継続を前

提として、国民生活を満足さ

せるべく、市場要素を各所に

導入して経済発展をはかるう

とするものである。

この半世紀は、米国の熾

烈な対峙の中で、政治的にも

経済的にも、いわば国家総動

員体制を維持して、主権を守

ってきた半世紀の革命でもあ

った。その中でフイデル・カ

ストロが傑出した指導力を

発揮してきたことは、だれも

否定できはいてあろう。

本書は、フランスの左翼的

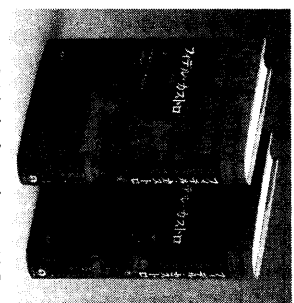
知識人イグナシオ・ラモネと

の2003年から約3年間、

計100時間茶にわたるイン

タビューである。

原書は、スズイン版2版、



岩波書店・各3200円

明治学院大学兼任講師

新藤通弘

評者